

『ウィズコロナと思いやり』

『地球温暖化の影響の中、この夏の猛暑をどう乗り切るか』と、7月初めには思っていました。しかし、江差町での最高気温は29.7度で、30度を超える真夏日は1日もありませんでした。気づけば青空の高くには鱗雲が張りついていて、朝夕には寒風を感じるようになっていました。暑さよりも記録的な豪雨が印象に残った夏であったように思います。人的被害はなかったようですが、農作物等の被害に遭われた皆様には心よりお見舞い申し上げます。

【行動制限のない夏休み】を過ごし、全国各地でコロナ感染者数が急拡大しました。感染者数の少なかった檜山・留萌管内も例外ではなく、感染者数が増大しました。自分の身近に感染の危険が迫っているのではないかという不安はよくわかります。現状では、『いつ』・『誰か』感染してもおかしくない状況にあると思います。もしも感染してしまった時に、少しでも症状が軽く回復することを願うばかりです。

(前文略) 熱がある私を母の職場は嫌がるのではないかと心配したが、皆が温かく声をかけてくれた。(略) 幸い私は新型コロナウイルス感染ではなかったが、そうであってもそうでなくとも、母達医療者には関係ない。彼らは最前線にいて、自分の恐怖の壁を乗り越え、人々の不安へ手を差し伸べている。母は、家族を守るため、誰かの大切な家族を守るため、自宅に帰らない方がよい、と泣きながら遺書をくれた。私は自分を躊躇なく迎えてくれた医療者の笑顔を生涯忘れることはないだろう。恐怖や不安は誰かを差別しても解決しない。まやかした。皆で心の恐怖の壁を乗り越え、医療者への差別をやめ、強くなろう。そう、明日救われるのは自分かもしれないのだから。

上記文章は、昨年度、ある中学校の生徒が、医療従事者である母が1か月もの病院詰めで不在となっていた状況下での体験を書いたものです。母は最悪の状況を覚悟し、家族に遺書を書き渡していました。喘息の弟がいるため、感染に十分注意していたのに発熱した彼女は、『恐怖で手が震え、自分を恐ろしく思い、母が感じた恐怖を実感した。』と書いています。誰もが家族や大切な人のことを考え、感染を恐れて生活し、感染した時には心を深く痛めます。それを誹謗中傷する現実があります。秋田県のPTA連合会では「**感染した方々には優しさを ウイルスと戦うすべての方々に感謝を**」と、感染者や家族・関係者への偏見や差別をなくし、医療・物流など暮らしを支える方々へ感謝することを発信しています。愛媛県から始まった『シトラスリボンプロジェクト』では、「**感染が確認されたその後に、的確な対応ができるかどうかでその地域のイメージが左右される**」として、ウイルスに感染してしまっても、地域の中で笑顔の暮らしを取り戻せるということの大切さと“コロナ禍”の「その後」を視野に入れた“暮らしやすい地域”づくりを提案しています。

夏は先の大戦を振り返る季節でもあります。私は、父方・母方ともに祖父が戦死しているので、会ったことはありません。祖父のような義理の伯父から聞いた話が頭に残っています。「銃弾の中を突進した。倒れていく仲間たちが目に入った。安全地帯に入り、『生きてたな』と顔を見合わせた隣の仲間の耳がなくなって血が垂れていた。その後、自分も傷を縫われたが、麻酔薬がなくな

っていたので麻酔なしだった。いてえのなんの。ほうじゃけど、その時よりもこの間の痔の手術の方が痛かったなあ。」と笑った後、「戦争は二度とあっちゃいけんし」とつぶやきました。

終戦記念日の天皇陛下のおことばは、戦没者への追悼のことばとともに、『私たちは今、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による様々な困難に直面していますが、私たち皆が心を一つにし、力を合わせてこの難しい状況を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を希求し続けていくことを心から願います。』というものでした。

この夏、運動公園や炎天下の歩道を歩く人がマスクを外している姿を多く見かけました。熱中症予防には必要なことです。外していたマスクを入店直前につけてから買い物をする方々もおられました。町民の皆さんが、自分と他の人の健康を気遣い、考え、意識して行動していることの表れだと思います。

冒頭にも記しましたが、第7波は、これまで少ない感染者数で推移してきた檜山管内にも大きな影響を及ぼしました。現在は沈静化してきましたが、今後も継続した感染対策への意識が必要です。多くの方に精神的な疲労も積み重なっていることと思います。かかりたくてかかる人は誰もいないのですから、これからも町民の皆さんで、お互いを思いやる気持ちを持つことを大切に対応していきたいものです。